



人権通信

2022年度 第4号

城/内中等教育学校・高等学校 人権委員会
レベラス部

こんにちは、人権委員会です。学年末考査も終わり、一気に春らしくなってきました。今年は桜の開花も早く、東京では3月14日に開花宣言が出ました。徳島でも3月下旬から4月初めが桜の見頃となりそうです。

さて、今回は41・42・44ホームルームの人権委員の皆さんに、先日の人権映画会で上映された作品である『破戒』の紹介、及び感想を書いていただきました。

映画『破戒』(2022)

(あらすじ) 被差別部落出身の瀬川丑松は、自らの出自を隠し通すよう父より強く戒めを受けて育ちます。その戒めを守りながら小学校教員となった丑松でしたが、出自を隠すため誰にも心を許せないことに苦しみ、一方で下宿先の士族出身の女性・志保に恋心を寄せていました。やがて、彼の出自について周囲が疑念を抱き始める中、丑松は被差別部落出身の思想家・猪子蓮太郎に出会い慕うようになります。丑松は猪子にすら、自分の出自を告白することができませんでした。そんな中、猪子の演説会が開かれ、丑松は強い感動を覚えますが、猪子は政敵の放った暴漢に襲われます。この事件がきっかけとなり、丑松はある決意を胸に、教え子たちが待つ最後の教壇へ立とうとします…

(みどころ) かつて木下恵介監督や市川崑監督により映画化されたこともある島崎藤村の長編小説を、間宮祥太郎主演で映画化。被差別部落出身という自らの出自を隠して生きる小学校教師の葛藤を描く。監督は前田和男、脚本は加藤正人と木田紀生が担当。共演には石井杏奈、矢本悠馬のほか、高橋和也、竹中直人、石橋蓮司、眞島秀和らが名を連ねる。

(感想)

○今回見た『破戒』は、部落差別が主なテーマとなっている映画です。主人公の瀬川丑松は、部落出身であることを隠していましたが、そのことで悩

み、苦しんでいました。その様子から、差別はたとえ直接的な暴力や言葉などなくとも、人を苦しめるのだと知りました。また、自分の故郷を言えない苦しさ、好きな人に自分の気持ちを伝えられないつらさなど、部落差別によってもたらされる丑松の苦しみや、彼の声にならない悲痛な嘆きが伝わってきました。映画の中での猪子蓮太郎の言葉にもあるように、人間には必ずとっていいほど弱い部分があります。しかし、だからといって人を差別したり、けなしたりするのは大きな間違いです。この機会を通して、自分自身についてしっかり振り返ってみようと思います。

○先生から子どもたちへ、子どもたちから先生への愛が伝わってきて、とても感動しました。大人たち自身が「四民平等」を掲げたにもかかわらず、その大人たちの差別に対する意識は残ったまま、仕事や結婚なども自由に選ぶことのできない時代と戦わなければいけない苦しさ。自分がもしその立場だったらどう行動できたのか、考えさせられる良い作品でした。

○この映画を通して私たちは、明治維新後も社会に残った部落差別について、リアルに学ぶことができた。衝撃的なシーンも多く、今の時代がいかにかに平和であるかを実感させられた。ただ、今も昔も、多くの人は平和を望んでいることには変わりないのだろう。

○現代は、インターネットの普及により、匿名での誹謗中傷が可能となった。これにより、部落差別も見えない場所で多く残っている。映画の中で猪子蓮太郎が言っていたように、未来でも差別がなくなることはないのかもしれない。しかし、だからといって見て見ぬふりをするのは間違っていると思う。立場の弱い人の意見が少しでも取り上げられ、多数派の考え方を見直していけるような社会を作っていきたい。

○映画『破戒』で最も印象に残ったシーンは、猪子蓮太郎が瀬川丑松に「人間は『愚か』」なのではなく『弱い』のだ」と話すシーンだ。この映画は今から100年以上前の明治時代における部落差別がテーマとなっているが、現代でも同じことがいえるだろう。自らを強く見せようとするために、決して他人を見下してはいけないと思った。

41・42・44ホームルームの人権委員の皆さんの意見はどうでしたか？

また、この作品はレンタルやインターネットでの配信もされていますので、ぜひ一度ご家庭でもご視聴いただき、ご家族で人権問題について考えたり、話したりしてください。

この人権通信が、人権について考えるきっかけになればと思います。

